



※写真は、『横倉山フォトコンテスト』で「金賞」を受賞した、冬の杉原神社を題材にした作品(『共存』:藤原隆夫(佐川町))

幽玄なる杉原神社

横倉山の第3駐車場から遊歩道を約15分ほど歩くと、突然大きな杉の木立ちに囲まれた神社が視界に入って来る。「杉原神社」である。その歴史は、源平の戦いに敗れた安徳天皇の一行がここ横倉山に潜幸せられた文治3年(1187)に勧請されたという言い伝えがあるから結構古い。

祭神は、伊邪那岐命・伊邪那美命で、元は大和金峯山の修験道の系統の三嶽山三聖大権現(「横倉山修験道」の中宮と称されていたが、明治4年(1871)に現在の社名に改称された。社殿は度々修築され、現在の建物は、周防国大島郡(現山口県大島郡東和町)の工匠・門井宗吉によって、明治8年(1875)に本殿、翌9年に拝殿が建てられたもので、特に本殿回りの彫刻(干支)は極めて精巧である。

明治初期には、四国はもとより遠く静岡県・愛知県・大阪府・兵庫県・岡山県・広島県などからの参拝客があり、その数約7000名と記されている。また、昭和に入っても、戦勝祈願その他のための

参拝客で随分と賑わっていたそうである。

神社の境内には、推定樹齢：500～600年、樹高：50メートル余の杉の巨木が立ち並び、早朝の朝日の差し込む様子や雨上がりの霧の立ち込める様子などはどことなく歴史と幽玄さを感じさせ、大変趣のある神社である。

平成12年(2000)

には、「安徳帝800年祭」が行われ、筑前琵琶の演奏(田中旭泉：滋賀県志賀町)と太刀踊り(佐川町太刀踊り保存会)が奉納され、境内に久しぶりに賑わいが戻った。



杉原神社を詠んだ
牧野博士(号:結網)の色紙

滅びゆく土佐の野生動物

安井 敏夫

高知県は、概して北の四国山地を背にし、南の太平洋側に大きく開いた細長い扇状の地形を成している。面積は7,106km²で、四国全土の37.8%を占め、四国四県の中では最も広い面積を有する。そして、全面積のうち森林の占める面積は実に84%にも及び、正に森林大国という感がある。一方、四万十川、仁淀川、物部川の3つの一級河川が県内の森林地帯を縦断するようにぬって流れ、山と川、海に恵まれた大変自然の豊富な風土であるということが言える。気候的には温帯に属するが、県東部、西部の室戸岬、足摺岬では亜熱帯性の植物が見られ、北部の四国山地の標高の高い地域では亜高山帯に相当する。このような自然環境の豊かさや気候の多様性のためか、高知県の動物相は豊富で、日本でも有数の種の数を有するとされている。それらの中には、ニホンカワウソで代表されるように、県内には今なお全国的にも数少ない絶滅危惧種の野生動物たちが細々と生き続けている。

ご承知の通り、“ニホンカワウソが現在生きるとすればそれは高知県西部だけである”と言われている。しかしながら、そのニホンカワウソについても、1979年の須崎市の新庄川で写真に取られたのが最後で、それ以後は生きたニホンカワウソの姿を見たという情報がなく、すでに絶滅してしまった可能性がある。かつてはわが町越知町の仁淀川や柳瀬川にも生息していたと言われ、その目撃例もある。



▲クマタカ（はく製）



▲ニホンオオカミの頭蓋骨（高知県仁淀川産）

日本特産種のオオカミで、かつては本州・四国・九州に広く分布していたニホンオオカミについては、1905年(明治38)の奈良県での捕獲例を最後に、生体及び死体による確認記録がなく、絶滅したと考えられている。剥製標本自体も極めて少なく、日本国内に3体、オランダに1体の合計4体しか存在しない。オランダの標本は、江戸時代〔1820年代〕に長崎出島のオランダ商館で医官を勤めていたドイツ人医師・シーボルトが帰国の際本国へ持ち帰ったもので、現在ライデン国立自然史博物館にタイプ標本として保管されている。

一方、頭骨は、国内に比較的多数保存されているが、その中でも特に、最近高知県仁淀川の民家に江戸時代の天保年間に捕獲された肉片付きのニホンオオカミの頭蓋骨が保管されているのが見つかり注目を浴びた。これについては、昨年、帯広畜産大学を中心とする研究グループによって、骨片中のミトコンドリアについてDNA鑑定がなされた。その結果、遺伝子(塩基)配列にオオカミの特徴がいくつか認められるものの大陸系のオオカミとも異なるグループに属することが明らかとなった。ちなみに、今回のDNA分析は、ニホンオオカミの遺伝子を解析した最初の試みである。

この他、高知県には、日本で最初に県西部の宿毛市で営巣(繁殖)が確認され“幻の鳥”と言われるヤイロチョウ(高知県指定天然記念物・高知県の県鳥)、ツキノワグマ、クマタカ、オオサンショウウオ(“生きた化石”)、ヤマネ(国指定天然記念物)などの絶滅危惧種や、氷河時代の生き残りで



▲オオサンショウウオ（越知町飯新川）



▲ツキノウグマ（はく製）



▲ニホンカモシカ（はく製）

日本の特産種であるニホンカモシカ（国指定特別天然記念物）など、いろんな珍しい野生動物が今なお細々と生息している。これらの中で、ニホンカモシカを除き、かつては越知町内にも生息していたかもしくは現在も生息しているものばかりである。特に越知町に関係の深いものとしては清流に棲み“環境のパロメーター”と言われるオオサンショウウオがある。仁淀川とその支流で時折体長が1メートルを越す大型の成体が採捕されるが、過去に体長30～40センチの“亜成体”が採捕された記録もあり、四国で唯一オオサンショウウオが繁



▲ニホンカワウソ（1979年／須崎市新庄川） 写真提供：高知新聞社



▲ニホンカワウソ（はく製／高知県大月町産）



▲ヤマネ 写真提供：中西安男

殖している可能性があるとして注目されている。

高知県内でも比較的自然的豊かな越知町ではあるが、過去には生息したが現在はすでに姿を消してしまった野生動物がいるという現実を見つめ、野生動物が絶滅していくということを単なる一現象、他人事としてとらえるのではなく、それが何を意味するのかを今こそ一人一人が真剣に考え、認識すべきではないだろうか。

（やすいとしお／横倉山自然の森博物館副館長兼学芸員）

横倉山自然の森博物館という建築

小田 保行

横倉山は、日本最古の化石・コノドントや約4億3千万年前のクサリサンゴ、ハチノスサンゴ、三葉虫、そして、日本最古の陸上植物化石・リン木などが発見されており、地球の歴史を知る上で非常に貴重な山です。また、世界的な植物学者・牧野富太郎が研究のフィールドとした山で、博士が25種類もの新種の植物を発見・命名し、現在でも絶滅危惧種を含めたくさんの希少植物が自生していることでも広く知られています。このように、「横倉山は世界的である」と言っても過言ではありません。

横倉山に博物館を建設することになり、私はそのプロジェクトの担当者になりました。基本構想ができ、いよいよ建築設計に入る時、ただの箱物にはしたくないとの思いがありました。そんな時、

高知県立美術館で「アーキテクチャ・オブ・ザ・イヤー展」が開かれ、建築家・安藤忠雄氏の講演を聞く機会があり、「建物も世界に誇れるようなものに」と考えました。紆余曲折はありましたが、結局越知町は建築設計・監理を世界的である安藤忠雄氏にお願いすることになりました。

安藤忠雄氏は、設計に入る前、「町がつくる建物は、町民がプライドを持てるような、そして、町民が元気になるようなものでなければならないと思います。そういうものに参加させていただ

れば幸いです」。そして、竣工時には、「あと3年ぐらいいたら、すっぱり森に埋まると思います。森の中のささやかな建物だけれども、中に入ってみると意外にダイナミックな空間が現われる、というのを考えたんです」、「たとえばコスモスがよく見える場所にするなど、町の人が誇りに思える建物にしたかった。誇りに思える場所があれば、町へ帰ってくると思うんです」、「日本最古の化石や牧野富太郎先生の業績などを、子供たちが来て、

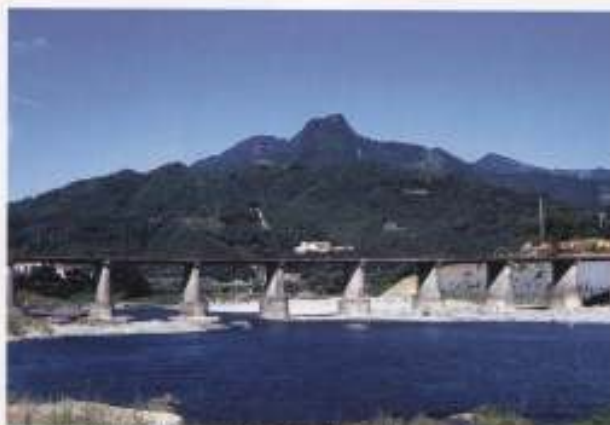
見て、考え話す場、次の時代を育む、心の交流の場にしてほしい。植物学のゼミナールなど外部との交流もあったらいいですね」とインタビューに答えられています。

それでは、建築としての横倉山自然の森博物館をご案内します。

横倉山自然の森博物館

は、横倉山の麓に位置し、仁淀川やコスモス公園、越知町市街地を一望できる場所にあり、景色が良いとともに、シンボリックな場所にあります。

平成14年10月で開館5周年を迎え、建物全体は木々の中に埋もれ、コンクリートが自然の中に溶け込むようになっており、展示物だけでなく周辺の四季折々の景色を屋内外で楽しむことが大きな魅力となっています。2階からアプローチするようになっており、まず、高く長いコンクリート打ち放しの壁の両側をスロープで上がっていきます。



横倉山の山懐に抱かれるように建つ横倉山自然の森博物館





前半のスロープは、仁淀川の川の方向に向かい周辺の景色を眺めることができます。折り返し地点まで進むと、水の音とともに水庭が目飛び込んできます。ここでは、壁に映る水のきらめき、野鳥やトンボたちの姿を見ることがもできます。最後にガラス張りの曲線の回廊を回り込むとエントランスに着きます。アプローチは、日常当たり前のように見ている自然を改めて意識する仕掛けであるように思います。

ロビー・展示室は、大きなガラスの開口部があり、室内から展示物を見ながら同時に外の自然景観も眺めることができるようになっています。2階では大きな窓が3ヶ所ありますが、同じ北東方向に開口部があるにもかかわらず、そこからの眺めはそれぞれに違ってきます。壁の高さ、長さによって変化させてあるようです。1階展示室は、水庭の水面と床の高さが非常に近く、繋がっているかのようで、時には水の向こう側の緑と空の青さが何とも例えようのない空間をつくりだします。そして、3階展望ロビーと屋上からは、日本でもトップク

ラスの水質を誇る清流・仁淀川や町の中心地、そして、秋には町のシンボルであるコスモス公園を眼下に眺めることができます。

このように、回りの自然環境を取り込んで一体化しているのが特徴であり、自然の要素である光・風・水・緑を感じていただける自然博物館です。そして、横倉山という太古の森を持つ神秘的の山を後世に伝えていく役割を果たしていくにふさわしい建築であると言えます。

最後に、この建築物の構造をよくご覧いただきたいと思います。建築に携わっていただいた設計者・施工者の努力が窺えるはずで、特に職人さんの苦勞の跡は、きつとご理解いただけると確信い



スロープ壁にゴッカリ空いた空間がまるで顔縁のようだ

たしております。

くどいようですが、日常を忘れ、ゆっくりと時の移ろいを体感していただければ、“癒しの場”としての魅力も味わっていただけると思います。

(こたやすゆき／越知町教育委員会生涯学習課補佐・前横倉山自然の森博物館総務係長)

博物館ニュース

夏休み特別企画展：
「世界の昆虫展—人と昆虫の共存できる地球—」

〔平成14年7月20日～9月1日〕

横倉山に棲む昆虫を始め、日本国内や世界各地の美しい昆虫や珍しい昆虫の標本、約700点、それに、トンボやゴキブリ、シロアリなどの化石10点を展示。

外敵から身を守るために、長い年月をかけて身に付けた昆虫たちの“知恵”や、身の廻りの生き物や気候などの自然環境に適応していった地域変異(色彩や形などの体の変化)、そして、高知県ではすでに絶滅危惧種や絶滅種となっている昆虫と、人間のくらしとの関わりなどについて紹介した。

また、会場内に昆虫飼育小屋を特設し、標本や化石だけでなく、実際に生きている高知県産や沖縄県産の蝶8種、日本産のオオクワガタや外国産のヘラクレスオオカブト、コーカサスオオカブト、キバナガノコギリクワガタ、オウゴンオニクワガタなど10種を放し倒いにし、小屋の中で生きている昆虫たちに直接触ったり、持ったりもできるような工夫してみた。

芳名帳の感想の中には、「美しい世界の蝶にため息が出ます」「大きな声でトンボの歌を歌いました」「小さいトンボがかわいかった」「今まで昆虫は気持ちが悪いと思っていたけど、今日ここにきたら昆虫と友達になれました」「いつも図鑑でしか見たことのない昆虫に触れることが出来て感激です。夏休みの最後の良い思い出になりました」「昨年に続いて来ました。子供達が何週間も前から楽しみにしていました。何回か来たいと思います」「3才の孫とともに高知市から三度来ました」などの有難い声も頂戴した。



スポーツ芸術・開館5周年記念特別展：
「土佐の生き物たち—滅びゆく野生動物—」

〔平成14年9月21日～11月4日〕

昨年の平成14年10月12日で、横倉山自然の森博物館は開館5周年を迎え、「よさこい高知国体」の「スポーツ芸術」と併せ、地元越知町と高知県に深い絶滅及び絶滅危惧種の野生動物を題材とした上記の企画展を博物館主催で開催した。出展資料は、ニホンオオカミ〔絶滅種〕・ニホンカワウソ〔絶滅?〕・ツキノワグマ・クマタカ・ヤイロチョウ〔高知県指定天然記念物・高知県の県鳥〕・オオサンショウウオ〔国の特別天然記念物〕・ヤマメ〔国の天然記念

物〕・ニホンカモシカ〔国の特別天然記念物〕で、主として複製をジオラマ風に動態展示し、写真パネルと解説パネルで補足説明した。

今回の企画展は、これら絶滅に瀕した野生動物の姿を複製や写真パネルを通じて県内外の人々に広く紹介し、その自然に近い姿や生態と共に、何故絶滅の危機に追いやられたのかを皆様と一緒に考え、そして、今後どうすればこれらの野生動物たちを思いやりの気持ちをもって絶滅の危機から救っていくことができるのか絶滅が意味するものを真剣に考える一つの機会になればという主旨で企画した。

感想として次のようなものがあつた。「自然保護について考えさせられます」、「自然を大切に、後の世代にも」、「地球は人間だけのものではないと改めて感じました」。



〔横倉山自然の森博物館開館5周年記念講演〕

〔平成14年9月29日 於：越知町民会館〕

当博物館の開館5周年特別企画展開催中に上記講演会を開催した。講演の内容を要約すると以下のようになる。

①演題：「土佐とニホンカワウソ」(町田吉彦・高知大学理学部教授)

ニホンカワウソの毛皮は良質で保温性にすぐれ、江戸時代には松前藩などは清国へ輸出していた。戦前も毛皮目的の狩猟・密猟が続き、戦後になっても密猟が後を絶たず次第に絶滅の一途をたどっていった。現在ニホンカワウソの生息の可能性のある地域は高知県西部と言われているが、1979年以降生きたニホンカワウソの姿は確認されていない。1994年に高知県佐賀町でニホンカワウソのものと思われる“タール便”(スプレイント)が見つかったが、生きた個体が最後に確認された須崎市新庄川でも、水量や魚が少なく、好物のテナガエビやモズクガニも少なくなっており、「ニホンカワウソの棲める環境はほとんど残っていない」という。

②演題：「海を隔てたニホンカモシカ」(中西安男・わんぱくこうちアマルランド飼育担当係長)

ニホンカモシカは、日本固有の唯一の野生のウシ科動物で、一時期は毛皮・肉目的の狩猟・捕獲により“幻の動物”とまで言われたが、その後国の特別天然記念物に指定され保護策が講じられるようになり徐々にその個対数を増やしてきた。氷河時代の生き残りとして“生きた化石”と呼ばれる。四国と本州のニホンカモシカでは、形態や生態に違いがあり、遺伝子(DNAの塩基配列)に関しても若干の相違があり、亜種のレベルでの違いが認められる。

夏休み博物館教室

〔昆虫教室〕

7月20日(講師：横倉山自然の森博物館副館長・高橋厚彦、協力者：「ふるさと川と山・夢の会」代表・山中伸一、参加者数：小人22、大人13)

初めに、当博物館で開催中の「世界の昆虫展」を見学。生きているカブトムシやクワガタの実態、昆虫が身に付けた知恵や昆虫と人間との関わりなどについて学習した後、越知町柴尾の「メダカ池」に出かける。山中氏からこの池が造られるようになった経緯や、その後この池に生息するようになったトンボの種類について説明をもらった。他の周囲では、クロスジギンヤンマやゴシアキトンボ、モノサシトンボなど8種のトンボが観察できた。

次に一行は、隣町の佐川町瑞応の梨園に向かい、山と積まれた堆肥の中でカブトムシの幼虫を採集。幸運にもタマムシの成虫までも発見し、採集することができた。

昼食後は、佐川町斗賀野にある虚空蔵山の麓で、オニヤンマのヤゴを採集する。間もなく成虫になる大人の親指ほどのヤゴも約30匹ほど見つけることができた。

午後からは、あいにくの曇天だったが、タカネトンボやナツアカネなどのトンボ4種、モンキアゲハやツマグロヒョウモンなどの蝶5種が採集できた。

(協力)：伊藤洋章氏(佐川町瑞応「伊藤果樹園」)

〔植物教室〕

8月4日(講師：高知市子ども科学図書館指導員・恒石直和、参加者数：小人6、大人5、学芸員実習生3)

最初に、最近の地球のCO₂の増加問題で、光合成を行いCO₂を吸収する植物の存在の重要性についてふれた後、ツユクサの気孔を顕微鏡で観察した。子どもたちからは「口みたいだった」「いっぱいあってすごいと思った」などの感想があった。



▲昆虫教室



▲化石教室



▲植物教室



▲フィールドサインを捜そう!

次に、果実が染料となる、くまつぶら科の落葉低木・クサギ(和名：臭木)について学習した後、植物標本作りをあらかじめ乾燥した植物を用いて行った。台紙に貼る植物標本の配置や葉・柄・枝を固定するテープの太さ、位置などを考えながらその特徴がよくわかるように貼布する。

〔化石教室〕

8月18日、8月28日(講師：横倉山自然の森博物館学芸員・安井敏夫、協力：友の会会員、参加者数：小人29、大人17、学芸員実習生2)

今回は、博物館からバスで約10分ほどの所の隣町・佐川町に分布する中生代三畳紀の川内ヶ谷層群中から産する「モノチス」と呼ばれる約2億1500万年前の二枚貝の化石の採集を行った。薄い平べったい殻と多くの放射肋をもち、皿型をしているため「皿貝」と呼ばれ、現生のホタテガイの先祖型に当たる貝で、多くの二枚貝の仲間の中でも最も「示準化石」としての価値が高いものの一つである。今回は完全な個体のはそれほど多くはなかったが、密集した状態で産し、しかも、結構転石の中に含まれているため皆十分な量が採集できたようだ。

18日は、あいにく地元越知小の行事「愛校日」と重なったため、28日に再度化石採集会を行った。

牧野博士を案内した児玉 集さん 越知町に来る

世界的な植物学者・牧野富太郎博士は、1933年(昭和8)に広島県に植物採集に行った際、芸北町(旧八幡村)を訪れ、そこに自生している燕子花(カキツバタ)に強く感動したと言われている。この時博士に燕子花の群生地を案内し一緒に山を歩いた「案内役」の人物が今も健在である。芸北町西八幡原在住の児玉 集氏(93歳)である。



牧野博士の研究のフィールドであった横倉山が越知町内

にあり、両町とも「自然」をキーワードに町づくりを進めているということもあって、児玉氏を間に取り持ち、現在越知町と芸北町とは町ぐるみで交流を続けている。その氏が昨年11月16日にはるる越知町の横倉山自然の森博物館にお越しになられた。

氏は植物だけでなくあらゆる分野に造詣が深く、特に牧野博士のコーナーではしっかりと口調で発言や質問もされていた。館内を見学後、佐川町の牧野博士の生誕地を訪れ、牧野博士が結成した「土佐理学会」の流れをくむ「土佐文化向上会」の元会長・水野 進氏の説明を受けた。

翌日高知市五台山の「牧野富太郎記念館」を訪問した後、高知を後にした。

児玉氏のかねてからの念願であった高知訪問が思い出として心に残り、いつまでもお元気で牧野博士の思い出話の語り部の一人であって欲しいと願っている。

友の会だより

博物館友の会「フォレストクラブ」の平成14年度の活動

- 4月14日(日) 横倉山ツツジ観察会
 - 11月23日(日) 博物館周辺整備(植樹・間伐・草刈り)
[「緑の募金」による助成]
 - 12月15日(日) クリスマスリース教室
- ※今年度は、他の行事との重複等で十分な活動ができなかった。

【クリスマス・リース教室】

12月15日(日)：参加者49名(指導者：菅谷美恵子、小田春香)
今年もフォレストクラブ主催の恒例のリース教室を開催した。参加者数は50名近くにもほり、午前と午後の2回に分けて行った。使用する材料も相当な量で、会場は熱気にあふれていた。指導を仰ぎながら各自好みの材料を使って仕上げていき、クリスマスにふさわしいそれぞれの味のあるリースが完成しみんな満足げであった。指導者と材料



集めに奔走してくださったかげの人たちの協力のお陰で今年も大成功のうちに終えることができた。

博物館日誌(抄) (02.3~02.11)

【平成14年度博物館行事】

- 3月23日(土) 博物館協議会
- 7月20日(土・祝日) 夏休み博物館教室(昆虫)
- 7月20日~9月1日(日) 企画展：『世界の昆虫展-人と昆虫の共存できる地球-』
- 8月3日(土)~10日(土) 学芸員実習受入れ〔I〕
- 8月4日(日) 夏休み博物館教室(植物)
- 8月17日(土)~24日(土) 学芸員実習受入れ〔II〕
- 8月18日(日) 夏休み博物館教室(化石)
- 8月28日(水) 夏休み博物館教室(化石)
- 9月3日(火)~9月10日(火) 学芸員実習受入れ〔III〕
- 9月21日(土)~11月4日(月・休日) 開館5周年記念特別企画展(スポーツ芸術)：『土佐の生き物たち-滅びゆく野生動物-』
- 9月29日(日) 横倉山自然の森博物館開館5周年記念講演
- 11月9日(土) 『フィールドサインを捜そう！-横倉山の動物達-』[こうちフィールドミュージアム協会共催]

スタッフの声、声、声

(片岡) 昨年12月14日夜、横倉山でふたご座流星群を観測しました。沢山流れてきれいでしたが、撮影した写真を見ると越知の空も光害が進行しているのがよく分かります。星がきれいに見える空を失いたくない！私の、いや、星にロマンを感じる人みんなの切実な願いです。

(高橋) 昨年10月上旬頃には、横倉山では1日に約2000羽ほどの「タカの渡り」や、一群れ100羽を超える「タカ柱」などを観察することができ、多くの野鳥ファンを魅了しています。サシバやハチクマ・ミサゴ・ハヤブサ・ノスリなどが南の方に渡っていくために、上昇気流の発生しやすい、この横倉山の上空にもたくさん集まってきます。

(安井) 昨年は植物の開花が2週間ほど早く、しかも、5月の長雨、6月の梅雨と、2度も「梅雨」があるなど正に天候不順の年であった。博物館も開館5周年を迎え、新たな変革を求めて次期へのイメージアップを計りたい。

(田中) 博物館に来て、横倉山に登る機会が増え、今まで知らなかった数種の希少植物を見ることができ嬉しく思

ます。一方、動物にはまだ一度しか出会ったことがありません。前任者のようにたくさんの動物に出会いたいものです。

(黒原) 小学校以来、久しぶりに横倉山に登りました。馬鹿試しのヨコグラノキの標準木を見た瞬間は、その時の懐かしい記憶もよみがえり、とても感動しました。また、畝傍山眺望所からの美しい景色を眺めながらのお昼ごはんは格別おいしかったです。

(細川) 博物館にきて、9ヶ月余り経ちましたが、日々新鮮な事ばかりです。自然が好きな私にとって、自然との様々な新しい出会いがあることは、大変嬉しい事です。これからも、身近な自然にもっと目を向けていきたいと思

(福岡) 最近までメダカが絶滅危惧種という事を知りませんでした。昔はあんなにもたくさん泳いでいたのに、今、館内の水槽で10匹ほど飼っていますが、みんなすごく気を使っています。寒くなってきたので特にそうです。無事冬を過ごして欲しいと願う毎日です。

高知県越知町立

横倉山
自然の森博物館

〒781-1303 高知県高岡郡越知町越知内737番地12
TEL 0899(26)1060 FAX 0899(26)0620

- 開館時間：午前9時より午後5時まで
最終入館は午後4時30分
- 休館日：毎週月曜日(祝日の場合は翌日)
12月29日 から翌年の1月3日まで
- 入館料：大人.....500円 ※各20名以上
高校・大学生.....400円 上の団体は
小・中学生.....200円 100円引替。
- 越知への交通
高知———2時間乗車30分 伊予灘線50分———佐川——バス約15分———越知

